

手袋を買いに

新美

南吉

寒い冬が北方から、狐の親子のすんでいる森へもやってきました。

ある朝洞穴から子どももの狐が出ようとしたが、「あっ。」とさけんで眼をおさえながら母さん狐のところへころげてきました。

「母ちゃん、眼に何かささった、ぬいてちょうだい早く。」といいました。

母さん狐がびっくりして、あわてふためきながら、眼をおさえている子どもの手をおそるおそるとりのけ

てみましたが、何もささってはいませんでした。母さん狐は洞穴の入口から外へ出てはじめてわけがわかりました。昨夜のうちに、まっ白な雪がどっさりふったのです。その雪の上からお陽さまがキラキラと照らしていたので、雪はまぶしいほど反射していたのです。雪を知らなかった子どもの狐は、あまりつよい反射をうけたので、眼に何かささったと思ったのでした。

子どもの狐は遊びにいきました。真綿のように柔かい雪の上をかけまわると、雪の粉が、しぶきのようにとびちって小さい虹がすつとうつるのでした。

するととつぜん、うしろで、「どたどた、ざーっ」とものすごい音がして、パン粉のような粉雪が、ふわーっと子狐におっかぶさってきました。子狐はびっくりして、雪の中にくるがるようにして十メートルも向こうへにげました。なんだろうと思ってふりかえってみましたが何もいませんでした。それは縦の枝から雪がなだれ落ちたのでした。ま

だ枝と枝のあいだから白い絹糸のように雪がこぼれて
いました。

まもなく洞穴へ帰ってきた子狐は、

「お母ちゃん、お手々が冷たい、お手々がちんちんする。」と、ぬれて牡丹色になった両手を母さん狐の前にさしました。母さん狐は、その手に、はーっと息をふっかけて、ぬくとい母さんの手でやりわり包んでやりながら、

「もうすぐ暖かくなるよ、雪をさわると、すぐ暖かくなるもんだよ。」といいましたが、かあい坊やの手に霜焼ができてはかわいそうだから、夜になったら、町まで行って、坊やのお手々にあうような毛糸の手袋を買ってやろうと思いました。

暗い暗い夜がふろしきのようなかげをひろげて野原や森を包みにやってきましたが、雪はあまり白いので、包んでも包んでも白く浮かびあがっていました。

親子の銀狐は洞穴から出ました。子どもの方はお母

さんのお腹の下へはいりこんで、そこからまんまるな眼をぱちぱちさせながら、あっちゃこつちをみながら歩いていきました。

やがて、行手にぼつりあかりが一つみえはじめました。それを子どもの狐がみつけて、

「母ちゃん、お星さまは、あんな低いところにも落ちてるのねえ。」とききました。

「あれは、お星さまじゃないのよ。」と、そのとき母さん狐の足はすくんでしまいました。

「あれは町の灯なんだよ。」

その町の灯をみたとき、母さん狐は、あるとき町へお友だちと出かけて行って、とんだめにあったことを思い出しました。およしなさいっていうのもきかないで、お友だちの狐が、ある家の家鴨をぬすもうとしたので、お百姓にみつかって、さんざ追いまくられて、命からがらにげたことでした。

「母ちゃん何してんの、早くいこうよ。」と子どもの

狐がお腹なかの下からいのでしたが、母さん狐はどうしても足がすまないでした。そこで、しかたがないので、坊やだけをひとりで町までいかせることになりました。

「坊やお手々を片方かたほうお出し」と母さん狐がいました。その手を、母さん狐はしばらくにぎっているあいだに、かわいい人間の子どもの手にしてしまいました。坊やの狐はその手をひろげたりにぎったり、つねってみたり、かいでみたりしました。

「なんだか変だな母ちゃん、これなあに？」といって、雪あかりに、またその、人間の手にかえられてしまった自分の手をしげしげとみつめました。

「それは人間の手よ。いいかい坊や、町へいったらね、たくさん人間の家があるからね、まず表にまるいシャツポの看板かんばんのかかっている家をさがすんだよ。それが見つかったらね、トントンと戸をたたいて、こんばんはっていうんだよ。そうするとね、中から人間が、す

こうし戸をあけるからね、その戸のすきまから、こっちの手、ほらこの人間の手をさし入れてね、この手にちょうどいい手袋てぶくろちようだいっていうんだよ、わかっただね、けっして、こっちのお手々を出しちゃだめよ。」と母さん狐はいいきかせました。

「どうして？」と坊やの狐はききかえました。

「人間はね、相手が狐だとわかると、手袋を売ってくれないんだよ、それどころか、つかまえて檻おのの中へ入れちゃうんだよ、人間ってほんとにこわいものなんだよ。」

「ふーん。」

「けっして、こっちの手を出しちゃいけないよ、こっちの方、ほら人間の手の方をさしだすんだよ。」といって、母さんの狐は、持ってきた二つの白銅貨はくどうがを、人間の手の方へにぎらせてやりました。

子どもの狐は、町の灯ひを目あてに、雪あかりの野原をよちよちやっ歩いていきました。はじめのうちは一つき

りだった灯が二つになり三つになり、はては十にもふえました。狐の子どもはそれをみて、灯には、星と同じように、赤いのや黄いのや青いのがあるんだなと思いました。やがて町にはいりましたが通りの家々ももうみんな戸をしめてしまつて、高い窓から暖かそうな光が、道の雪の上に落ちているばかりでした。

けれど表の看板の上にはたいてい小さな電燈がともっていましたので、狐の子は、それをみながら、帽子屋をさがしていきました。自転車の看板や、眼鏡の看板やそのほかいろんな看板が、あるものは、新しいペンキでえがかれ、あるものは、古い壁のようにはげていましたが、町にはじめて出てきた子狐にはそれらのものがいったいなんであるかわからないのでした。

とうとう帽子屋がみつかりました。お母さんが道々よく教えてくれた、黒い大きなシルクハットの帽子の看板が、青い電燈に照らされてかかっています。

子狐は教えられた通り、トントンと戸をたたきました。

「こんばんは。」

すると、中では何かことごと音がしていました。やがて、戸が一寸ほどゴロリとあいて、光の帯が道の白い雪の上に長くのびました。

子狐はその光がまばゆかったので、めんくらつて、まちがった方の手を、——お母さまが出しちやいけなといったてよく聞かせた方の手をすきまからさしこんでしまいました。

「このお手々にちょうどいい手袋ください。」

すると帽子屋さんは、おやおやと思いました。狐の手です。狐の手が手袋をくれというのです。これはきつと木の葉で買ってきたんだなと思いました。そこで、「先にお金をください。」といいました。子狐はすなおに、にぎってきた白銅貨を二つ帽子屋さんにわたしました。帽子屋さんはそれを人さし指のさきにつ

けて、力手合わせてみると、チンチンとよい音がしましたので、これは木の葉じゃない、ほんのお金だと思いましたが、棚から子ども用の毛糸の手袋をとり出してきて子狐の手に持たせてやりました。子狐は、お礼をいってまた、もときた道を帰りはじめました。

「お母さんは、人間はおそろしいものだっておっしゃったがちっともおそろしくないや。だってぼくの手をみてもどうもしなかったもの。」と思いました。けれど子狐はいったい人間なんてどんなものかみたいと思いました。

ある窓の下を通りかかると、人間の声がしていました。なんとというやさしい、なんとという美しい、なんとというおっとりした声なんでしょう。

「ねむれ　ねむれ

母の胸に、

ねむれ　ねむれ

母の手に——」

子狐はそのうた声は、きっと人間のお母さんの声にちがいないと思いました。だって、子狐がねむるときにも、やっぱり母さん狐は、あんなやさしい声でゆすぶってくれるからです。

するとこんどは、子どもの声がしました。

「母ちゃん、こんな寒い夜は、森の子狐は寒い寒いってないでるでしょうね。」

すると母さんの声が、

「森の子狐もお母さん狐のおうたをきいて、洞穴の中でねむろうとしているでしょうね。さあ坊やも早くねんねしなさい。森の子狐と坊やとどっちが早くねんねするか、きっと坊やの方が早くねんねしますよ。」

それをきくと子狐は急にお母さんが恋しくなってお母さん狐の待っている方へとんでいきました。

お母さん狐は、心配しながら、坊やの狐の帰ってくるのを、いまかいまかとふるえながら待っていましたので、坊やがくると、暖かい胸にだきしめてなきた

いほどよろこびました。

二ひきの狐は森の方へ帰っていきました。月が出たので、狐の毛なみが銀色に光り、その足あとには、コバルトのかけがたまりました。

「母ちゃん、人間ってちっともこわかないや。」

「どうして？」

「坊、まちがえてほんとうのお手々出しちゃったの。でも帽子屋さん、つかまえやしなかったもの。ちゃんとかんない暖かい手袋くれたもの。」

「といって手袋のはまった両手をパンパンやってみせました。お母さん狐は、

「まあ！」とあきれましたが、「ほんとうに人間はいいものかしら。ほんとうに人間はいいものかしら。」とつぶやきました。

「手袋を買いに」

※『新装版 新美南吉童話集 1 ごん狐』
(2012年12月1日、大日本図書株式会社)の「手袋を買いに」をもとに編集しました。

※このテキストを個人的に読む以外の利用をされる場合には、新美南吉記念館までご連絡ください。
(TEL : 0569 - 26 - 4888)